

現代イギリスの「公式戦争美術」について

神戸大学 石田 圭子

本発表のテーマは現代におけるイギリスの「公式戦争美術 Official War Art」である。

イギリスには第一次世界大戦時以来、公式に任命したアーティストを戦地に送り、戦争を表現した作品を制作させるプロジェクトが存在し、その中でポール・ナッシュやグラハム・サザーランドらによる有名な作品が生み出されてきた。そうした第一次・第二次世界大戦時のイギリス公式戦争美術プロジェクトに関してはすでに詳細な研究がなされ(近年では Malvern, 2004 / Foss, 2007 など)、その内容がかなり明らかにされている。しかしながら、そうしたプロジェクトを現在なおイギリスが継続していることは一般にほぼ知られておらず、派遣された画家たち個々のモノグラフは刊行されてはいるものの、俯瞰的な観点から今日の戦争美術プロジェクトの意味について考察し評価する試みは、管見の限りいまだなされていない。

イギリスでは現在なお、有事にあたってイギリス軍が動員され、それが記録すべき重要な事件であると判断される場合には、紛争地に公認アーティストが派遣されている。その例としては、1982年のフォークランド紛争、1991年の湾岸戦争、1994年のボスニア紛争、2000年代のアフガニスタン紛争などが挙げられる。そうした事例を取り上げて、なぜ現在なお戦争美術が制作されているのか、今日の社会とアートの状況下でどのような戦争美術が可能であり、どのような作品が制作されているのかを明らかにし、今日におけるその意味について考察することが本発表の目的である。具体的には、フォークランドに派遣されたリンダ・キットソン(Linda Kitson 1945-)、湾岸戦争時のジョン・キーン(John Keane 1954-)、ボスニア紛争時のペーター・ホーソン(Peter Howson 1958-)、アフガニスタン紛争時のデレク・エランド(Derek Eland 1961-)などの作品を参照する。

彼らによる今日の公式戦争美術作品を見て理解されるのは、当然のことながら、戦争忌避の傾向がかつての大戦時とは比べようもなく強くなった今日では、その内容が変容していることである。そこには紛争をもたらす国際政治への皮肉や戦争時の性暴力の直接的表現なども見られる。また形式にもリレーショナル・アートなど近年のアートの発展が反映されている。しかしながら、これまでもそうであったように、戦争美術はそれが制作された政治的状況と密接に関わっており、それを無視して評価することはできない。例えばイギリスが戦争や紛争の当事国である場合と干渉戦争として関わる場合では、その内容は異なっており、今日の戦争美術が平和主義と芸術の自律性を前提として制作されていると考えるなら、その意味を見誤ることになるだろう。本発表では、現在の公式戦争美術プロジェクトを統括しているイギリス帝国戦争博物館(IWM)の存在や意図とも照らし合わせながら作品について考え、今日における戦争美術の意味を明らかにすることを試みる。